京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十五卷　第六號

大正十一年十二月一日發行

論叢

相續稅に於ける特殊累進に就きて　法學博士　神戸正雄
勞農露國の農業　法學博士　河田嗣郎
マルクス氏の集產主義の實行難を論ず　法學博士　田島錦治
基督教文明の發展概論　法學博士　財部靜治
經濟道と經濟術　法學士　作田莊一

資料

中央市場論并に食料品配給費研究　法學博士　戸田海市

說苑

リストと歷史派經濟學　法學士　山口正太郎
我國の都市及地方に於ける婚姻の統計的觀察　經濟學士　岡崎文規

雜錄

無責任なる飜譯の一例　法學博士　河上肇
原田學士譯ボーリュー經濟學原論價格指數に就て　經濟學士　小川福太郎
法學士　汐見三郎

附錄

本誌第十五卷總目錄

說苑

リストと歷史派經濟學

山口正太郎

一

拾九世紀の中葉頃は自然科學の勃興に伴つて實證的精神の旺盛な時代であつた、莊嚴な殿堂を仰ぎ見るの感ある立派な學說であつても經驗的事實と背反する限り、個々の具體的事實の證明を伴はない限り、そは砂上の樓閣に外ならない、一個の獨斷論であるとの譏を免れない、當時の思潮は實證的精神に裏付けられた自然科學的見解が形而上學を說服したる凱歌の聲そのものであつた。[1] 此思潮は他の諸科學に影響せずには止まなかつた、我經濟學も亦、此實證的精神の下に歷史派經濟學の成立を見るに至つた。

拾八世紀末より拾九世紀初葉にかけ、今を盛りと世にときめきし英國正統學派の經濟學に對し二つの强き反抗思想が現はれた、一つは正統學派の利己心と自由競爭との根本基調に對する科學的社會主義の勃興であり他は正統學派の科學的方法論に反對する歷史派經濟學の出現である。

アダム、スミスは云ふ『凡ゆる商品の價格は常に中央價格 Central price とも云ふべき自然價格

1) Windelband, Geschichte der Philosophie. 8 Auf. 1919. S. 524.

natural price に向つて引きつけられてゐる、種々の偶發事件は商品の價格を或は自然價格以上に或は以下に保つことがあるが、此等の偶發事件は如何なるものであつても、商品の價格は絶えず自然價格に向ふものである』[2]。日常の市場價格は自然價格は中心として、それの上下に高低してゐるが in the long run に於て結局、自然價格に歸向する、市場價格は恰かも波瀾重疊、浮沈たゞならぬ海面の如く、自然價格は靜かなる水平面で、スミスの言葉を以て表はせば center of repose and continuance である、歷史派經濟學をして云はしむれば斯の如き合理的なる自然價格は經濟學者の頭腦に描かれたる空想であつて實現の可能性を有せない、實現する眞の價格なるものは、換言すれば吾人の日常目擊する經驗的價格なるものは浮沈極りなきもので、從て經濟學の對象としては變動常なき物價をこそ撰ぶべきで、吾人が海と云ふ時、其處には大小の差はあるが常に波風立てる海面を指す如く吾人の日常の價格の觀念には空想的なる自然價格は之を無視して差支がないと云ふであろう。

アダム、スミスは處々に at all times and places と云ふ句を使用してゐるが歷史派經濟學は經濟現象を斯くの如く時間と空間とを超越する普遍的なるものとは見ない、場所的にも時間的にも制限せられた個々の具體的現象として時間の流の中に發生し消滅するものと見てゐる。[3]

フリードリッヒ、リストは普通に歷史派經濟學の創始者と看做されてゐる、以下リストの學說を考究するに當つて私はリストが果して英吉利正統學派の方法論に反對する歷史派經濟學の創始

2) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's ed. Vol. I. p. 60. Ashley's ed. p. 57.

3) 拙稿「歷史派經濟學方法論の變遷」思想大正十一年四月號參照

者の名を辱かしめないかどうか、氏の稱ふる方法論自身に矛盾はないかどうかを特に氣を附けて觀察してみたいと思ふ。

二

一七八九年八月六日ロイトリンゲンの町の一蹄皮商の子として生れたフリードリッヒ、リストは父の職業を嫌つて夙くから商館の書記になつて餘暇に勉强した、彼の一生は決して幸福ではなかつた、一八四六年十一月三十日ピストルで自殺した彼の死體が降り積む雪の中に發見された、[4] 彼の死する五年前、彼の名を不朽に傳ふべき主著 Das nationale System der politischen Oekonomie が出版され僅かの間に三版を出すに至つた、然し出版されたのは此書の第一部で副名を「國際貿易、商業政策及び獨逸關稅同盟」と云ひ、此後第二部として「將來の政策」第三部として「國民の富及び勢力に及ぼす政治制度の影響」を出版する豫定であつたが遂に世に出るに至らなかつた。[5]

抑も一個の學說が成立するには其時代、其環境の影響を免れ得ないものであるが此事は社會科學の一種たる經濟學にあつては最も著しい、然も其中にあつて、フリードリッヒ、リストの經濟學說の如きに至つては其時代、其社會の產物たる事、歷然たり過ぎる程で、其環境を沒却してはリストの學說の意義の奈邊にあるかを知るを得ない、よつて今姑らく當時の狀態を一瞥するを許して戴きたい。

リスト當時の獨逸聯邦は互に內國關稅の高い障壁を築いて居つて內國商業の發達を妨害するこ

4) Scheyrer, Friedrich List, Ein Lebensbild, 1907. S. 18 Stöhr, Friedrich List, 1911. S. 30 Most, Friedrich List, 1906. S. 15
5) Waentig, Vorrede, Sammlung sozial wissenschaftlicher Meister. Bd III List's Das Nationale System der Politischen Oekonomie. VI.

とが甚しかつた、稅率も複雜で凡そ三十八種に及び特に普魯西では六十七種にも上つた、隣邦佛蘭西では既に一七九一年に內國關稅は撤廢されて商業上の發達を促すこと大であり、更に英國に於ては一七〇七年の英蘭と蘇格蘭との關稅の統一はアダム、スミスをして大英帝國繁榮の根本原因の一なり one of the principal causes of the prosperity of Great Britain[6] と云はしめた程である、然るに獨逸では全く之と反對の狀態にあり、且つ內部に互に障壁を有することは同時に外國に對しては統一力のないことを意味することゝなつて佛蘭西で遮ぎられた英國の低廉な商品が盛んに獨逸へ入つて來た、此獨逸の危期に際して內國關稅の撤廢と對外的には全き一國として保護關稅を設けて外國商品の競爭を防ぎ自國の產業を保護すべしとの聲が高まつたが其先頭に立つものはチユービンゲンの敎授を罷めて當時、雜誌記者となつてゐたフリードリツヒ、リスト其人であつた、リストは之と共に更に當時の濁逸の政治的傾向が官僚的であるのを痛擊した、其爲め罪を獲て下獄された[7]、然し時勢の進運は內國關稅の撤廢を實現し一八二八年ババリヤとウルテンベルヒとの間、及びプロシヤとヘツセ、ダルムスタツトとの間に關稅同盟締結せられ一八三四年には遂に近代獨逸が實現することゝなつた。

抑も國家間の交易に於ては、個人間のそれの如く自由に放任せしむる時は最もよく發達するものであらうか、自己を最もよく知るものは自己なるを以て自由に放任せしむる時は最良の策を講じ利己心に從つて最も多くの利益を得る、此道理を國家に移し各自其長所に從つて自由に交易せしむる時は各國家とも最も繁榮すべしゝ自由貿易論者は云ふ、乍然英國の如く商工業とも優れた

6) Adam Smith, Wealth of Nations Cannan's ed. vol II. p 384.
7) Gide et Rist, Histoire des doctrines economiques. 3 ed. 1920. p. 314.

る國には自由放任論は可なれども獨逸の如く當時立遲れたる國に於ては自國の產業を保護すべく貿易政策を利用せねばならぬではなからうか、先進國と後進國とが自由に放任せられて自由に競爭する時は後進國は遂に敗者の地位に立たねばならぬのは自明の理ではあるまいか、英國正統學派の學說に反對し來りたるリストは政策論に於ても亦反對の位置に立つてゐる、リストの經濟學說の大部分は政策論であり保護貿易の主張であつて既に多くの學者によつて述べられたことでもあり、私の興味の中心からも離れ過ぎたものであるから政策論の吟味に移ることを止めたいと思ふ、唯一言すべきはリストは幼稚なる產業を保護すべきことを主張したが、農業の保護を唱へなかつたことである、蓋し工業の發達は當然農產物に對する需要を增加し農產物の價格を高め農業を刺戟して自然に發達せしむるから特に農業を保護する必要がないからである、更に一步を進めて考ふれば農業保護の結果、農產物の價格を騰貴せしむる時は却て他の產業の發達を阻害することゝなるからである。

三

一八二五年の夏、リストは家族を伴つて米國紐育に渡航し、ラフアイエットに歡迎せられて米國の經濟事情を視察した、其際彼の發した言葉は次の有名な文句あつた。

『私はアメリカに着いてからは一切、書物を放棄した、書物の智識は私をして誤つた途に導くからである、此國に於て讀み得る經濟學の最良の書物は實際生活である、此國では野蠻狀態から富

有な國家への發達の經路が見られる、經濟上の發達階段は明瞭に眼前に展開してゐる、歐洲では數世紀かゝつた發達階段が茲處アメリカでは一目で見渡すことが出來る、卽ち野蠻狀態から牧畜時代、農業時代を經て現今の商工業時代に至る迄、眼前の事實として見ることが出來る、茲處では地代が無代價から高價に至る迄、其發達の狀態を見ることが出來る、又素朴な農夫すら茲處では歐洲の大學者達よりも一層よく如何にてし農業を改良すべきかを知つてゐる、……實際生活の此書物を私は熱心に且つ貪り讀んだ、そして從來の私の研究と比較して見た。[8]』

彼は斯樣に演繹的、抽象的な理論を排して經驗を重視し、書物より得たる智識が實驗より劣れることを主張した、彼は之と同じ態度を以て英吉利正統學派の經濟學を非難した、彼は云ふ。

『正統派經濟學は三つの大なる誤謬を有する、第一には基礎薄弱なる世界主義で、國民性を無視し國民の利害を考へざること、第二には冷たき物質主義で物價の交換價値のみ眼中に置いて國民の精神的、政治的、及び現在と未來の利害關係、生產力の問題を看過してゐる、第三には秩序を紊し組織的精神を缺ける個人主義に陷り、そのため社會的勞働や協力が立派な効果を齎すことを無視してゐる。[9]』

彼によれば正統派經濟學は特殊の歷史的發達を有する各國の國民性を無視して學理を構成したのであるから其理論は抽象的であつて歷史的事實に當て篏まらない、國民性の差違を沒却した所謂世界主義は空想に外ならない、又正統派は世界主義と同時に經濟單位を個人となし自由競爭の下に他人を押し除けて進む個人主義を採る、そして國家の事業をも私的企業の如く看做すけれど

8) List, Vorrede, Das nationale System der politischen Oekomie. XVII-XVIII Waentig's ed. S, 11. Scheyrer, Ibid. S. 8-9.

9) List, Ibid. S. 255. Waentig. S. 267.

も個人主義思想を以ては解し得られない多くの事實があり、殊に國家なるものによつて初めて行はれる事も隨分多い、斯くリストは正統派を非難し來つたのであるがハルレ大學のアイゼンハルト教授は此點はリストの創見ではなくアダム、ミュラーの "Elemente der Staatskunst" より借り來たれりと云ひ[10]シュラー氏も亦アイゼンハルト教授の説に贊成してゐる。[11]

リストは更に言を續けて、

『個人と國家との中間には國民と云ふ範圍がある、特殊の言語、文學、特殊の血統と歴史、特殊の風俗習慣、法律制度、特殊の領土を有し、國民全體としての利害を有して他の國民と對立し、從て自己の力と手段とを以て獨立を主張してゐる、個人が主として國民によつて、又國民として精神的教養、生産力、安寧秩序が得られると等しく人類社會の文明は國民の文明的發達に基く』と。[12]

斯く國民性を重要視し來りたるリストは政治及び經濟の任務を次の如く説く。

『各國民の狀態は無限に異れるもので、或國民は巨人にして、或國民は侏儒なること等の人種的差違は勿論、文明、半開、野蠻の差あり、各國民は個人と等しく自己維持の衝動を有し、完成に向つて努力しつゝある、政治の任務とは野蠻人民をして文明人たらしめ、少さく弱きものを、大にして强からしめんとするにある、然し先づ第一着手としては自己を維持し且つ永久に、無窮に傳へんとする努力を確保するにある、而して國民經濟の任務は國民の經濟的養成を實行し將來の發達を期するにある。』[13]と、

10) Eisenhart, Geschichte der Nationaloekonomik. 1881. S. 181.
11) Schüller. Die Wirtschaftspolitik der Historischen Schule. 1899. S. 85.
12) List, Ibid. S. 256. Waentig. S. 268.
13) List, Ibid S. 256-257. Waentig. S. 268.

四

佛蘭西の新進經濟學者 Rist は『茲に注意すべきはリストはリカルドーに就ては少しも語らない、唯スミスとセイに就て云つてゐるだけで此二人の著述だけは讀んだのであろう』[14]と云つてゐるが、實際リストは正統學派に反對するとは云ふものゝリカルドーには言及せないで、然もアダム、スミスを主として對象としてゐるのである。

アダム、スミスは富及び交換價値を研究してゐるが富そのものを創り出す力 Kraft には無關心である、富そのものと富を創り出す力とは全く別物である、而して後者は前者よりも遙かに重要である、成る程、アダム、スミスは富を創り出す力として分業を論じた、そして分業論はアダムスミスの富國論中、有名な個所ではあるが、其分業なるものは必竟物質を生産する力たるに過ぎない、アダム、スミスは富を生産する力としての精神力を看過して物質主義に陷つてゐるとリストは云ふ。勿論スミスは勞働の生産力は熟練、器用等の差によつて影響されると云つて幾分精神力の事にも言及してゐるが、然らば之等の精神力を如何にして養成すべきやと云ふことは述べて居らない、吾人にとつて重要なのは現在の富とか交換價値とか云ふことではない、之等の富なり交換價値なりを將來創り出す力である、如何に富あるも將來生産を續くる力なくんば忽ち貧乏となるであろう、それ故、先づ生産力の養成を計らねばならぬと云ふ、茲處にもリストの保護貿易政策による幼稚産業の保護の精神の片鱗を窺ふことが出來る。

14) Gide et Rist, Histoire, p. 316.

彼は云ふ『正統學派は物質的富、或は交換價値を研究の對象となし、肉體的勞働のみを以て生産力なりとする大なる誤謬に陷つてゐる』[15]と又彼は云ふ『正統學派は政治と經濟とを全く分離せしめてゐる、經濟學の對象は唯價値と交換とのみで、價値、資本、利潤、勞賃、地代の概念を決定し其構成等要素を分解説明し、之等の騰落の原因を闡明するのが經濟學の職務だとして政治的關係には少しも觸れない』[16]然し經濟現象は政治的關係と沒交渉では眞相を解するを得ないではなかろうか、殊に生産力の養成、幼稚産業の保護等に於ては經濟現象と政治關係とが密接に抱合してみるのではないかと。

アダム、スミスは物質的價値の研究を以て經濟學の對象として、教育、法律、宗教、科學、藝術等の精神的勞働が生産力に及ぼす效果には無關心である、彼の經濟學は交換價値の科學であつて生産力の科學ではない。[17]國民の富は交換價値の總計より成立するのでなく實は其國民の生産力から成り立つのである。[18]正統派の經濟學は國民經濟を個人經濟と同一視し、後者の説明を以て前者を類推しようとする、然し此二者は全然性質を異にするもので個人經濟の集合は直ちに國民經濟を構成するものではない、此二者が矛盾衝突する時は國民經濟のためには個人經濟を犧牲とすべきこともある、國家の權力が私的企業を抑壓する場合の多くの例を擧げてリストは自由放任政策の誤謬を説き國家の保護干渉を是認してゐる。[19]

リストは各國民は其言語、習慣、歷史等を異にし其天産物も亦異るを以て各自其商工政策を異にすべきが眞理にして英國正統學派の如く普遍的に、各國共に同じ學理に基きて行動すべしと

15) List, Ibid. S 213, Wantig. S. 231.
16) List, Ibid. S 211, Waentig. S. 229.
17) List, Ibid. S. 206-207. Waentig. S. 225.
18) Rambaud, Histoire des doctrines économiques. 1909. p. 429.
19) List, Ibid. S. 240-244. Waentig. S. 254-258.

の主張は採るべからずとなし、語を更めて、アダム、スミスが一工場内に於ける分業の利益を述べたる序を以て更に之を擴張して國際間に分業の行はるゝの利益を述べなかつたのを揶揄してゐる。[20]

以上を要するにリストのアダム、スミスに對する反駁は次の二點に歸することが出來る。

(一)アダム、スミスは世界主義と個人主義とを主張し此中間に存する國民性を沒却したる事、歴史的傳統を異にする諸國民を通じて普遍的なる經濟原理を適用せんとするは大なる誤謬であつて經濟學は國家本位、國民中心でなければならぬこと。

(二)アダム、スミスは物質主義であつて經濟學を交換價値の學に墮せしめ國富を以て現在存在せる物質的價値の總計なりと解し國民の將來の生産力を顧慮せなかつたこと、國富を物質的價値の總計と見るは皮相の見解であつて其裏面に活躍せる生産力が眞の國富なのである、此事はリストが全卷を通じて各所に述べてゐる、アダム、スミスが資本を以て貸借對照表上に表はれたる交換價値と看做すに對して資本は斯くの如き物質的、具體的のものでなく將來の精神的、肉體的の生産力を意味することを述べ資本の概念にも反對してゐる。[21]

五

リストの保護主義の思想は何處から得來つたものであろうかと云ふ事に就ては學說史の上に種

20) List, Ibid. S. 481. Waentig. S. 459.
21) List, Ibid. S. 322. Waentig. S. 325.

々の異論がある、佛の經濟學史家 Rambaud によると米國のダニエル、レイモンド Daniel Raymond の Thoughts on political economy. 1820 から得たと云ふ、[22] リストが數年米國に滯在して保護論者と交際して居たことから察すると此論が確かも知れない、(此說を採るもの Hirst, Life of Friedrich List, Kohler, Problematisches zu Friedrich List. あり) 同じ佛國の Rist はリストのインガーソルに當てた書簡集 (List, Letters to Ingersoll) から推して彼の生產力の思想は Dupin の著述 Situation progressive des forces de la France, 1827 から得たもので、幼稚產業保護の思想は Chaptal の著 De l'industrie francaise, 1819 から採つたものだと云ふ、[23] 更に奇なるはカール、マルクスが餘剩價値學說第一卷に於てボナパルト家の輸出入制限制度の稱贊者 Ferrier の Du gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce. 1805 から出たものだと云ふ。[24] 私は孰れを確かなりと斷定する材料を持ない、此點は他日に保留したいと思ふ。

經濟學はリストによれば經驗に基く科學であり、實際生活の經驗から成立するものである、然らば經驗とは何ぞやと云へば彼に從へば事物の自然の狀態を認識することであつて自然の狀態は其儘歷史を構成する、卽ち彼に從へば自然と歷史とは背反せずして一致する、經驗と自然と歷史とは矛盾せずして等しい意義を有する。[25] そして此三者が彼の學說の基礎を構成してゐる、正統派經濟學は世界主義で自由貿易政策を主張するも之れ經驗に反する、之等の觀念は頭腦の產物であつて、事實は却て『國民的立場』と『國民の產業的養成』の必要を示す、經驗の事實は國民中心

22) Rambaud, Histoire des doctrines économiques. 1909. p. 419-420.
23) Gide et Rist Histoire. p. 325.
24) Marx, Theorien über den Mehrwert, Heraus. von Kautsky. Bd. I. 339.
25) Litschitz, Die historische Schule der Wirtschaftswissenschaft, 1914. S. 7-8.

主義であつて、世界主義は空想に外ならない、事實上、各國民の存在條件は相違して居り商業政策も亦之と共に異るもので決して絕對的なる自由貿易政策を最高命令として振り翳すべきではない。正統學派は更に又、理想と現實、ゾルレン　ザインとを混同してゐる、正統學派にして現實の立場に立脚するとせば決して國民性を沒却するを得まい、國民性を無視して世界主義を採るは明かに現實を棄てゝ理想を描けるものである。[26]

リストにあつては經濟現象は經驗に基いて解釋すべきものであり、自然法的見解の下に說明せらるべきもので、斯くすることは同時に、彼にとつては歷史的解釋を意味することゝなり、自然と歷史は毫も矛盾せない、經驗的事實を歷史的に叙述することが彼の經濟學に於ける方法論であつて、然も其經驗的事實も其歷史的叙述も何等の創意を混えず、自然の事實として、自然法の下に服從する事實として叙述するにある。リーフシツツ氏の言を以て云へばリストの方法論は『自然科學的歷史哲學』naturwissenschaftliche Geschichtsphilosophie[27] である。

リストは英吉利正統學派の方法論を獨斷的と評し、世界主義を空想と蔑視し、總ての時と處とに妥當する絕對的理念を排し、經驗と必然性 Erfahrung und Notwendigkeit とに基く歷史的方法論を主張した點に於て彼には歷史派經濟學發生の萠芽を內に藏せるを見る。極端に云へば正統學派は絕對論であり、リストは相對論である、又他の方面より觀察すれば正統學派が常に理想を有し目的論的であるに對し、リストは實的で因果論的である、卽ち telos に對する causa の主張である。

26) Lifschitz, ibid. S. 15.
27) Lifschitz, ibid. S. 17.

六

リストは有名なる發達階段說を唱えた、『國民經濟の發達に關する諸國民の主なる、發展階段は左の如し、野蠻狀態、遊牧狀態、農業狀態、農工狀態、農工商狀態』[28] Rist は此階段別に對して曰く『此區別たるや實はアダム、スミスが富國論第二篇第五章に於て資本の種々なる用法を說明した中に農業狀態、農工狀態、農工商狀態の發達階段を用ひたのを言葉通り其儘借用したに過ぎないことは今迄誰も氣附かなかつたことだ』[29] と、Rist の說が正しとすれば經濟發達階段說は却つてアダム、スミスの創意であつてリストが之に野蠻狀態、遊牧狀態を附加したに過ぎぬことゝなる階段說の創意の何れにありやは姑らく舍き假りにリストの創見なりとするも、此階段說なるものはリストの方法論と甚しき矛盾を有するものである、リストの階段說は其後、多くの學者によつて、經濟的事實に基いて反對された如く、或國は遊牧狀態を經過せずして農業狀態に入り、又或國は農業狀態より以前に工業狀態の存在せしことあり、リストの發達階段說は彼の最も嫌へる演繹的方法の下に成立したるもので歸納的に事實を擧げて反駁し得らるゝ程、單なる頭腦の抽象的產物である、彼は經濟的事實を重要視すべきを說き、抽象的なる學理の無價値を高調しながら不知不識の間に發達階段說なる抽象的產物を捻出し來つた。

思ふに、リストのみならず歷史學派の人々が方法論上、演繹的、抽象的學理の無價値を口を極めて罵倒しながら、不知不識、何等かの抽象的學理を捻出し、自己の高調する經驗的事實と矛盾

28) List, Ibid. S. 17. 259. Waentig. S. 63, 271.
29) Gide et Rist, Histoire, p. 218.

することを平氣で主張し居れるは、之れ彼等が表面、經驗的事實を重要視するも單に之等の事實の集積、分類、敘述のみにては一科の學問としての存在權を主張し得ないで、何かしら抽象的に之を組織立てることを必要とすると無意識的に考へたからではあるまいか、今一歩を進めて考ふれば、歷史派經濟學が假令其方法論に於て徹底し、個別的事實の敍述を完全にし抽象的方法を毫も混ずることなしとしても之を以て科學としての經濟學が成立したとは考へられない、歷史派經濟學の方法論を詳細に說ける該派の重鎭クニース氏によれば『經濟生活の狀態並びに經濟學說は如何なる形を採るも結局は歷史的發達の結果に外ならぬ、彼等は時間、空間、國民性等の條件の下に發生し之等と共に存在し徐々として發達して行く、彼等は歷史的生活の中に彼等の議論の基礎を有し歷史的解決によつて其結果を導いて來る』[29]『經濟學の對象は歷史的現象の世界にある、一定の領土と結び付いた國民の共同生活の範圍に於ける經濟行爲、從つて個人、團體、國家の經濟行爲が歷史現象として觀察せらるゝ限り經濟學の對象である』[30]經濟學の本質はクニースによれば歷史的敍述である、然し歷史的事實、經驗的事實は無限に雜多であつて之を敍述することは到底如何なる科學も成就し得る處ではない、茲に於て經濟的なるものと然らざるものとを辨別せなければならぬ、クニースによれば、然らば經濟的とは何ぞやと云ふに明瞭なる解釋が與へられてゐない、經濟的實在の不合理性 Irrationalität des Empirisch-Realen を經濟學なる科學に整序すべき基礎概念が與へられてゐない、クニースにしても、ロッシャーにしても經濟的事實を整序すべき方法の認識論的研究に觸れないで形而上學的に經濟學の成立を認めてゐるだけである、私は歷史

29) Knies, Die politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 1883. S. 24.
30) Knies, Ibid. S. 490.

派經濟學は更に之を洗錬すれば文化科學としての經濟學とならねばならぬと思ふ、其事は他の機會に讓る。[31]

今、議論を溯らしてリストの階段說に返らう、リストの發達階段說は經驗的事實と違反し演繹的推理なることを以て彼の方法論上の矛盾として指摘することが出來るが、然し又他の見地からして次の如く解することも出來る、其例として新歷史派の泰斗シュモラーを擧げる、彼は云ふ、リストの階段說は種々の事實を以て反對することが出來るであらう、然し斯樣な反對は大局から見れば瑣末なことに過ぎない、リストの說が抽象的產物であるとしても、猶、彼が歷史的立場に居つて、正統學派の普遍的方法に反對して斯樣な階段的な歷史的發達を述べた處に彼の階段說の意義があるので正統學派が時と處とを超越してゐるに對し、假令抽象的たりとの譏はあつても猶歷史的立場を失つては居ないのであると。[32]要するにシュモラーにとつてはリストの階段說は正統學派が企て及ばざりし歷史的立場の一つの旗印なのである。

リストの歷史觀は自然因果論にして目的論にあらず、自然法則の下に於ける事物の原因結果の關係が彼の所謂歷史を構成する、然らば彼は果して此見地を徹底せしめたかと云ふに決して然りと云ふことは出來ぬ、彼は云ふ、『精神を取り去つた跡の物は總て死せる物質である』[33]と、彼によれば物質は獨立性を有せない、自然因果の法則の下にあるは精神によつて裏付けられたる物質で

31) 拙稿「歷史派經濟學と文科學」表現六月號參照
32) Schmoller, Friedrich List, als praktischer Volkswirt. 1909. S. 12.
33) List, Ibid. Vorrede S. XLIV. Waentig. S. 29.

あつて其精神なるものは彼によれば常に一定の目的を有するものであり、其目的の中に彼自身の政策論の基礎を包括せるものであるから目的論を排せる彼の歷史觀は不知不識の間に矛盾を犯してゐることになる。

リーフシツツ氏は彼の自然因果論的歷史觀の矛盾の一つを摘發してゐる。リストは常に『正常な狀態の國民』と云ふことを念頭に置いてゐるが此正常な狀態と然らざる狀態とは如何にして判斷することが出來るか、之を判斷するには價値判斷を必要とし彼の自然因果論のみでは一を採りて正常な國民となし、他を然らずと云ふことは出來ない、リストは目的概念を明瞭に採り入れてゐる、彼は歷史現象を單に叙述するにあらずして多くの價値判斷を用ひてゐる、其價値判斷の基礎もプラグマチツシユな皮相的な實際論の立場を出ない、それにしても兎に角、自然因果論と目的論とが混淆して彼の歷史觀を形成してゐるので決して前者のみで徹底したものではないと、[34]

リストの方法論はウインデルバンド、リツカード等の所謂、自然と歷史との峻別には思ひ到らずして兩者を調和しようとした處に矛盾が存在する、自然と歷史、或は自然因果論と目的論とは如何に言葉を巧みに表面上調和しようとしても、其奥底に於ては到底相容れない、此相容れない二つを同時に採り入れたがためにリストの方法論は頗る不徹底である、彼自らは自然科學的歷史觀を唱へながら目的概念を含み、自然法則が實際論的歷史觀と結び付いてゐる、それ故、リストは一つの方法論の上に彼の學說を組織立てた人ではなく、彼自身の主張は兎に角として、實際に

34) Lisfchitz, Ibid. S. 27.

於て多くの方法論を採り入れ何等の統一なく右に左に動搖してゐるのである。

以上でリストの學說の要領を大體述べたことゝ思ふ、讀者は氣附かれたであらう如くリストの經濟學は學理としてよりは實際の事情に迫まられた政策論に其意義がある、リストの存在の意義は學者としてよりも實際家として關稅同盟の設立に努力した點にあるのであろう、彼の國民中心の思想は當時の獨逸の統一を眼中に置いたからで、彼の經濟思想、幼稚產業保護の思想は獨逸のみならず多くの國に多くの利益を齎したが、[35] 然し彼の功蹟は唯、其點にあつて純理としての學說の建設の上にはない、彼は必竟一個の政策家であつて純理の研究者ではない、彼は普通に歷史派經濟學の創設者を以て目せられてゐる、然し歷史派經濟學が嚴密なる方法論上に於て、英吉利正統學派の方法論に對立し之を完膚なき迄に打破するにはリストの經濟學は其使命を果したものではない、彼にあつては歷史派の萌芽は之を認め得よう、然し嚴密なる方法論としての歷史學派の建設は彼の次に出でたるロッシャーに俟たなければならない、リストは國民中心の經濟學を唱へ英吉利正統學派の世界主義、個人主義に反抗した、然し彼は其經濟學を嚴密な方法論によつて基礎付けなかつた　彼の方法論は上述せる如く矛盾撞着せるものである、之を以ては歷史派經濟學の方法論と主張するを得ない、私はリストを以て國民性の經濟學、一種の傳統主義經濟學の創始者と云ひたい、然し嚴密な方法論上よりする歷史派經濟學の主張者であるとは云ひたくない、時勢は學說を生む、リストの經濟學を讀み了りて思ふ、當時の獨逸にして初てリストの學說を生ずと、リストの效蹟は保護貿易政策と關稅の統一の實際政策的方面にあり、學理としては矛盾頗る多きものにして歷史派經濟學創始者の名を彼に與ふるは過ぎたりと。（完）

35) Scala, Friedrich List, Gedächtnisrede. 1906. S. 13.